【博士論文要旨】

『恋愛の近代』―近代日本における恋愛と結婚をめぐって―

洪世峨(ホンセア)

男女間のロマンティックな行為で具現される恋愛は、現代人にとっては、人生の普遍的な価値にまで受け入れられ、その地位を揺るがないものにしている。そして、「恋愛」という言葉、もしくは恋愛という概念について、私たちはいつの時代でもどこでも普遍性を持っているように考えがちである。

しかし、歴史を振り返ってみれば、その恋愛観や性愛観は時代とともに多様性を持って変化してきたし、性と愛をめぐる諸価値観も、社会的・歴史的な文化現象の中で誕生した一つの思想・思潮であることがわかるのである。

現代の男女間の恋愛と結婚の源流とされる「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」は 18 世紀から 19 世紀にかけて欧米社会に誕生し、明治時代輸入品として日本に入り、その後、叙々に普及していったと言われる。

柳父章は、その著書『翻訳語成立事情』(岩波書店 1982 年 4 月)で、「「恋愛」は、「美」や「近代」などと同じように翻訳語であり、この翻訳語「恋愛」によって、私たちはかつて、一世紀ほど前に、「恋愛」というものを知った。つまりそれまでの日本には、「恋愛」というものはなかった」と言いきっている。

要するに、近代以前の日本の男女関係を「色」や「情」で現われる肉体関係とし、明治期知識人よって発見された精神的な男女関係を「恋愛」

としているのである。

北村透谷の「恋愛は人世の秘鑰なり」という一句の衝撃により発見され、明治知識人の高尚なる趣味として、神聖なる精神的な恋愛が語られた明治期の恋愛は、肉体的関係を否定し、それにまつわる性欲、結婚、恋愛が切り離して考察された。だが、その二元論に明治期の恋愛論の限界性がある。

その限界により残された課題、いわゆる恋愛というものが発見と解放から一歩を踏み出し、恋愛に肉体と性欲を関連づけ結婚の問題まで真正面に扱うことになるのが大正期であり、その牽引役を果たしたのが厨川白村の『近代の恋愛観』であった。

“Love is best”を提唱して恋愛に基づく結婚だけにその道徳を求めた厨川白村の恋愛論は、大正期のデモクラシーの風とともに恋愛至上主義ブームを引き起こしたのである。

だが、恋愛を人生の最大の価値として位置付け、恋愛に基づくロマンティック・ラブにその思想の根本をおいていた白村も、その恋愛と結婚の矛盾から自由にはなれなかった。彼は、時代的背景を踏まずに、男女間の差異と、ジェダンー的な考察に欠けていたため、理想主義としての一過性の恋愛ブームで終わってしまった。そして、ジェンダー的考察のない恋愛と結婚の観念は、婦人解放どころか、却って、女性たちを抑圧する装置として使われた。

しかし、それに真っ向から対抗していたのが、『青鞜』という場を通して女性の声を大いに上げていた新しい女たちであった。人間として自己に生きることを自覚するノラ時代を経て、国家と家制度に管理されていた女性セクシュアリティをめぐる問題意識を世に投げかけた彼女たちの恋愛論は、婚姻によって一生涯を権力服従関係に置かれざるを得ない

女性たちの体験に基づく切実な問題提起であった。

女性たちにとって恋愛と結婚は、男性知識人の机上の議論とは違って、妊娠、出産、ひいては育児という現実の問題が付きまとうことであった。

『人形の家』のノラ婦人の家出がいくら騒がれても、舞台上のノラは、退場すればそれまでだったが、現実のノラたちには、退場なんか出来ないものであった。彼女たちは、ノラの時代を通過して、生きていかなければならなかった。そして、恋愛と結婚を経験した彼女たちが至ったところは母性であった。母となった彼女たちは、良妻賢母主義に対抗し、家父長制の抑圧に立ち向かった時とは、全く別次元の壁に遭遇することになった。そして、母の時代を迎えた彼女たちは、その後到来する大正期の恋愛ブームの中では、舞台の表から遠ざかっていったのである。

本論文では、近代日本で発見・誕生されたと言われている、「恋愛」が近代日本において、いかに誕生し語られていたのか、その議論を中心に時代における「恋愛」の意味合いを検討していく。古今東西かかわらず人間の最大の関心事であり、人間の営みのなかで最も複雑かつ大事な役割を果たしてきた「恋愛」というフィルターを通して、日本の近代という空間を除き見ることを試みる。